

共同研究プロジェクト

多様化する学生と大学英語教育

2015年度活動報告

陸 君・中窪 靖

1) はじめに

今年も昨年度と同様、春学期に「英文法コース」を、秋学期に「PowerWords コースプラス」を学生への課題とした。3年目の今年は、再び昨年と同様に「英文法の強化」を先に、それに続いて「語彙力の増強」を行った。

学生の学習態度は、担当者の“誘導の仕方”によって大きく異なった。1週間に必ず一度は学生の学習の進み具合をチェックし、尚且つそれが成績の可否に直結すると促すクラスは、比較的多くの学生が学習に励んだ。一方、学生の活動をまめにチェックし学生に学習を促すことをしないクラスは、学習する学生がほんの一握りに過ぎないという結果となった。翻って見れば、こうした少数の学生は、如何なる条件であろうと如何なるクラスに属していようと、学習を自ら実行できる学生であろう。もちろん、すべてのクラスで、学習を14時間行って初めて成績の10%を獲得できるという条件を与えている。その条件が誘因となることの顕著な結果は、学期末の間際に駆け込み的に学習時間を増やす学生の層がいることである。

しかしながら、この条件が学習の誘因とならない層がいる。そうした学生の中には、学期途中でクラスへの出席を放棄する学生たちがいる。また、たとえクラスの出席はできていても、このコンピューターの学習にまで至らない学生もいる。

一つの理由として考えられるのは、学習に取り組む際に、教室の学習に加えて自由な時間を英語に当てる余裕がない層の増加が考えられる。特に、プレテストで成績の振るわなかったクラスの学生にこうした傾向は顕著である。

次に、秋学期の「PowerWords コースプラス」において、便宜的に4つのクラスを抜粋してみる。やはり、学生への管理の仕方によって、学生の取り組みの態度が変わってくる。課題をこなせない場合、成績が不可になると告げたところ、取り組む学生の数が増加した。一方、最初にやり方のみ説明した後、途中の段階で学習の取り組み具合を指摘しない場合は、ほんの一握りの学生を除いては、誰も学習をしていなかった。

後者の事例において、学期も3分の2を過ぎた後に学習を促したが、最終的に課題として14時間を超える学習を達成できたのは、以下の人数の学生のみである。

クラス(1) → 4名 臨床(レベル7) 2年
 クラス(2) → 0名 総合(レベル8) 2年
 クラス(3) → 13名 臨床(レベル1) 2年
 クラス(4) → 9名 総合(レベル8) 1年

クラス(1)とクラス(3)とを比較してわかるのは、最下層と最上層との違いは、モチベーションを持つことのできる層が3倍の開きがあるということだろう。最上層では、最後に帳尻合わせのできた三分の二の学生が最終授業を待たずに、課題の時間をこなすことができた。ところが、最下層では、授業の最終回後の締め切りを待っても、課題をこなすことができたのは、たったの4名であった。

クラス(2)とクラス(4)とを比較してわかるのは、同じレベル(最下層)であっても、学年によってモチベーションに差があったということである。やはり、大学に入学してまだ浅い1年次生の方が、教師の言葉から危機的な意味を読み取ることができるのだろう。

2) データの公開

1年目に一度、第52回大学英語教育学会国際大会のポスターセッションに参加している。再び3年目の今年度に、大学英語教育学会国際大会のポスターセッションに参加した。今回のテーマは、課題の取り組みの効率を考えることにあった。一週間に1時間の学習を行い14時間をこなすという課題は同様である。この中で、学生の学習の動向がいかなるものであるか、春学期を3つに区分しそれぞれの区分にどれだけの学習をやり遂げるのかを見た。それを棒グラフにして、視覚的にインパクトを持たせることとした。

8月29日、30日、31日の3日間に渡り開催された第54回大学英語教育学会国際大会において、それらのデータを数値化し、ポスターセッションに参加した。そこで明らかにしたのは、学生を学習サイクルの中に組み込むのが難しいということである。約3カ月間の春学期を便宜的に3分割し、それぞれの学習の時間を棒グラフで表すと、最後の1月間の猛烈に学習を始める傾向が顕著に見られた。

全8クラスある中から、上・中・下のクラスを選び、データを収集した。着実に学習を進める学生は、最後に実施するレベル診断テスト&レベル修了テストにおいて伸びを示した。いずれのレベルも3カ月間の学習の成果を見せ、それなりの伸びを示したが、特に一番上のレベルにおいては、コンスタントに1日当たり10分の学習を心掛けた学生の伸びが顕著であった。

また、学生には以下の3項目においてアンケート調査を実施した。

問1 一週間当たり1時間の学習ができたか？

問2 力の伸びを感じているか？

問3 弱点を克服することを目標に学習をしたか？

まず問1であるが、一週あたり1時間の学習を実行できたのは、1年次42%であったが、2年

次では19%にとどまった。次に問2であるが、自身の力の伸びを感じているのは、1年次は28%であったが、2年次では16%にとどまった。最後に問3であるが、目標を掲げ弱点を克服したのは、1年次は35%であり、2年次では24%であった。

相対的に、大学入学後の緊張感を保っている1年次の方が、いい結果を示した。ただし、目標を立てた学習スタイルという観点から見ると、特に学年による顕著な差異は生じなかった。

3) この1年を通して

春学期は「英文法コース」を、秋学期は「PowerWords コースプラス」を課題とした。学生の取り組みとしては、過去2年間と大差はない。

3年目に再度ポスターセッションに参加した。今回のテーマは、課題の取り組みの効率を考えることにあった。一週間に1時間の学習を行い14時間をこなす中で、学生の学習の動向がいかなるものであるか、春学期を3つに区分しそれぞれの区分にどれだけの学習をやり遂げるのかを見た。視覚的にインパクトを持たせるために棒グラフで示した。条件は以下である。

(1) 学期当初と最後の「レベル診断テスト&レベル修了テスト」を受験している。

(2) 7時間以上の課題学習履歴がある。

この二つの条件をクリアする学生を各々のレベルで採取し、各レベルごとに12人を選択した。彼らは3つの区分でコンスタントに学習を続けることのできる集団ではあるが、特に各区分にほぼ均等に学習するグループは、レベル修了テストの伸びを示す学生が多かった。

これらは、プロジェクト開始当初からの課題である中間層から下位層にある学生のモチベーション付けの困難さを浮き彫りにする結果となっている。